同窓会便り

発　行
東北大学・電気・通信・
電子・情報同窓会
仙台市荒巻字青葉
TEL　22−1800
発行責任者
高野知彦
（題字　高野知彦氏）

和田先生御逝去

柴田幸男

電子工学科教授和田正信先生は昨年一月十日膵臓癌のため急逝されました。

一昨年八月末頃から背中の痛みを訴えておられましたが、神経痛とお考えになってしばらくそのための処置をしておられました。当時、図書館長や第八回液晶国際会議の組織委員長として多忙な日々を送っておられたこともあり、そのまま二カ月余りを過ごされましたが、十一月になって痛みが激しくなり、精密検査のため厚生病院に入院されました。その後十一月二十日に手術を受け一時は小康状態を得られましたが、十二月二十五日頃より再び悪化され一月十日御永眠なされました。

告別式は昨年一月二十七日東北学院礼拝堂にて、多数の参列者のもとでしめやかに取り行われました。

先生は東北帝国大学電気工学科を昭和十四年に御卒業になり、同学科の助手、助教授を経て昭和三十三年に教授になられ、御逝去されるまで一貫して東北大学の学術研究教育に献身されました。また、この間、評議員、附属図書館長、文部省学術審議会委員、国立大学協会第六常置委員会委員など多数の要職を歴任され、学内外の行政管理運営にも多大な貢献をしておられます。一方、諸学会の会長、副会長に推され、その発展に御尽力されました。

先生の御研究は、真空管、電気・光変換、画像工学と、常に時代の要請を先がけて展開され、これらの分野の指導的役割を果たしてこられました。その功績に対してテレビジョン学会より丹羽・高柳功績賞が贈られています。特に最近の約十年間は液晶および液晶表示素子の御研究に熱意を傾けられ、多くの業績を残されるとともに、産業界を指導されて日本の液晶産業を世界第一の地位に高められました。先生のこのような功績と学術研究教育の貢献に対して政府からは従三位に叙せられ勲二等瑞宝章が贈られ、また米国SID（情報表示学会）および米国IEEE（電気電子学会）よりそれぞれフェローに推されました。

後輩や学生に対しても、先生は厳格な中に暖かい思いやりと抱擁力をもって指導なされ、幾多の有能な教育者や研究者、技術者を世に送り出してこられました。広い心と卓越した洞察力に基づくお考えを伺うことも最早かなわぬこととなりましたが、先生のお教えは今後も私達や卒業生の中に生き続けていくものと思います。

御冥福を心からお祈り申し上げます。

恩師和田先生を偲ぶ

関寅雄

卒業と同時に和田研究室に入門した私は、先生のもとで十五年間にわたり公私ともにご指導を受けました。その後東北工業大学に転出することになりましたが、何か事があれば先生の所に駆けつけて指導をいただいたものです。今でもむずかしいことがあると、ふっと、先生ならどうおっしゃるかな、という想いが私の頭をよぎるとともに、あゝ先生はもういらっしゃらないんだな、とあらためて恩師を失った寂寥感におそわれることがしばしばです。

先生は大変頭が切れ、弁説が巧みで実行力に富んだかたでした。先生は教育、研究や産業は勿論すべての方面に対し深い見識を持ち、私どもには頼もしい、たよりがいのある存在でした。研究室での先生は、細かいさしずはせず私どもに自由に研究をさせましたが、一方要所要所をおさえ、正しい方向に導いて下さいました。教育者として学者として、厳しい面もありましたが、人間的な思いやりが深く、良く気の付くかたで、私ども弟子は勿論、なんと多くの方々が先生のお世話になったことでしょう。

私が先生のお言葉に接した最後は一昨年の十二月二十二日の午前のことでした。その時先生は大変ご気分が良く、私達の見舞を大変喜ばれました。そしてIEEEから送られたフェロー就任の記念のネクタイピンを見せて下さいました。先生も大変うれしそうで、〝これも皆んなのお蔭だよ。早く元気になって皆んなのために頑張りたいよ〟とおっしゃいました。真の病名を知らされていた私は、皆んなのために頑張ろうとご自身の恢復を信じておられる先生のお姿に深く胸を打たれました。それから一両日後、先生の病状は急変し、間もなくこの世を去られたのです。

普段あんなにお丈夫な先生が、大きな抱負と情熱を抱きながらもこころざしなかばでご他界なさったことは、先生やご遺族はもちろん私どもにとっても痛恨の極みでした。今はただ先生のご遺志に沿うよう努力するとともに、先生のご冥福をお祈りするのみです。

小野寺先生御逝去

穴山武

電気通信研究所小野寺大先生は、昨年三月十六日午前四時二十分、仙台社会保険病院において腹膜炎のため逝去されました。享年五十一才。先生は数年前、一時健康を害され入院されましたが、その後また健康を回復され、これからの活躍に大きな期待が寄せられていた矢先、昨春一月急に病状が悪化され、御家族をはじめ関係者の必死の祈りもむなしく逝去されましたことは誠に痛惜の極みであります。

先生は岩手県の出身で、旧制第二高等学校を経て昭和二十七年三月東北大学工学部電気工学科を卒業され、直ちに工学部副手となり、昭和三十年電気通信研究所助手、三十六年同助教授、四十四年には教授に昇任され、電気通信研究所制御工学部門の担当教授として薄膜電子工学及び超電導工学の分野で数多くの優れた業績をあげるとともに、電気系の学部・大学院の教育に大きな足跡を残されました。

先生は、我国の電子計算機の揺籃の時代に、大泉研究室の一員として東北大学にはじめて設置された大型電子計算機SENAC−一号の計画に参画され、これを契機に強磁性薄膜、金属薄膜抵抗などの研究を手がけられ、今日の薄膜電子工学の基礎となる多くの成果をあげておられます。特にタンタル金属薄膜抵抗器の研究は、北陸電気工業によって実用化され、この功績に対して昭和四十九年紫綬褒賞が授与されております。

しかし、何といっても先生の業績の中で特筆すべきは超電導工学の分野での先駆的研究でありましょう。昭和三十年初頭、我国において超電導応用の研究がまだ緒につく前に、いち早く電子計算機への応用に注目してクライオトロンの研究に着手し、トンネルトロン、ジョセフソン効果の研究から更に磁束量子を情報担体とするジョセフソン伝送線路による電子計算機回路へと研究分野を発展させ、独創的なアイデアに基づく数々の論文を発表し、名実ともにこの分野のパイオニアとして我国における超電導エレクトロニクスの学問分野を築くために指導的な役割を果してこられました。

最近、超電導コンピュータが次の時代を担う計算機として世の注目を集め先生の生涯をかけた研究が漸く花を開こうとする気運にあります。このような折に、先生は忽然と世を去り、我々は今更のように掛がえのない人を失った思いを深くしております。

「大ちゃん」の愛称で誰からも親しまれ、春風駘蕩としたおおらかな人柄で人々の心を惹きつけた先生のありし日の面影をしのびながら、心からご冥福をお祈りする次第です。

小野寺先生を偲ぶ

杉田慶一郎

小野寺先生の事を語る時、小野寺先生の生前の教育、研究に残された大きな足跡について述べなければならないのは勿論ですが、この事に関しては他の先生方がお書きになることと思われますので、私は私達昭和二十七年卒の同級生が思い浮かべる〝大ちゃん〟（私達には大ちゃんでないとぴったりしないので、そう書かさせて頂きたい）のイメージについて一言述べさせて頂き、小野寺先生を偲ぶ言葉にしたいと思います。

大ちゃんは研究者である前に一人の人間として誠に温かみ溢れる人間性の持主であった。この事は大ちゃんを知っている人達が均しく認めるところである。私達と話をしていても、偉さを押し売りしたり、知識をひけらかしたりする所は微塵もなく、一種独特のオアシス的雰囲気を漂わしていた。私なども気易さから、多少個人的な事や仕事のことで屡々お邪魔して愚痴を言ったり、不平を言ったりしたが、彼と話をしている内に、自分の心が何時しか和んで来るのを覚えることもしばしばであった。あの優しさと温かさは何処から来るのだろうか……

大ちゃんの話には、人を説得する力があった。それは彼の話術が巧妙で論旨明快なためでは必ずしもなく（と言うと叱られるかもしれないが）、相手の立場を尊重し、相手のために真剣に考えている温かい心が、直かに伝わってくるためである。大ちゃんの声もいい。あのソフトな一寸高音の特長ある声は、私達の心の弦に、響く様に伝って来る。あれにはとても抗し得ない。私達の同級生には、大ちゃんを思い出すたびに、あの声が明るく響いているものと思う。

大ちゃんの話に説得力がある秘密の一つは表現力を超えた純粋さなのだと思う。だから私達は大ちゃんに何時も若さを感じた。若さと言うものは、美醜を超えたエネルギッシュな生命力とか、又一方未熟さというものを意味しているかもしれないが、最も本質的なものは純粋さだと思う。私達は三十代、四十代と年を重ねるにつれて分別が出てくる一方、純粋さを失って行く様に思われる。大ちゃんの中には、この純粋さが学生時代から失われないで残っていた。これが大ちゃんの若さの秘密だと思う。そして私達同級生には爺むさい大ちゃんなんてとても想像出来ない。

私達はもう大ちゃんには会うことは出来ない。しかし大ちゃんは私達同級生の心の中に永遠の若さをもって生き続ける事と思う。

大ちゃんとお別れしてからもう一年になろうとしている。日常の雑事に追われて、大ちゃんが心から愛しておられた御遺族の方には大変御無沙汰してしまった。どうか御二人の御子息達も大ちゃんの遺志をついで、大きく成長されんことを…。

高崎卓二郎先生を偲んで

村上孝一

昨年の二月のはじめに仙台に大雪があり、高崎先生はそれが原因で風邪をめされ、次いで肺炎を併発し、旬日をまたずに急逝されてからはや一年の歳月が過ぎ去りました。

先生はお若いときからテニスで鍛えられた頑健な身体の持主であり、まさかこんなかたちでお亡くなりになるとは夢にも考えておらず、本当に残念の極みです。

私は大学院特別研究生後期課程終了後、高崎先生の下で助手、助教授を勤め、先生が東北大学を御退官後、工業教員養成所の仕事に移られてからは同所の非常勤講師として先生の御仕事の手伝を致しました。

此の長い先生との年月を通じ、先生は本当にまれにみる優れた教育者であったことをしみじみ感じました。

先生は常に弱い者の味方であり、経済的困難に直面している学生、病気のため学業を全うする事ができなくなりかかった学生、或は家庭環境の不遇な学生たちに、教壇をはなれ常に親身になってその解決に努力してくれました。

また卒業、就職後も教え子の相談にのり、勤務先の仕事上の不満や、転勤、再就職のあっせんなど、本当に精力的に解決をしてくれました。先生はお子様のおられなかったせいか、教え子一人一人を実の子供の如く遇してくれました。

先生の御逝去後に、奥様も、そして私共も存じあげない多くの卒業生の方々から、先生の御逝去を悲しむたくさんの手紙が奥様のところに届けられている事をみても、先生が教育者として如何に人間性豊かな優れた方であったかを改めて感じさせられております。

先生は昭和三十年頃に特殊形状の風力発電機を製作し松尾鉱山で蓄電池充電用に実用化を行ない、原子力発電用電磁ポンプの研究を率先して取上げ、固定子ギャップ可変による可変速度誘導電動機の試作研究を進めるなど、着想に富む研究者でもありました。

先生はお酒を召し上がらず、お菓子とくに和菓子が大好物のようでした。先生と御一緒の出張の折には、列車の中で、また宿の食事の終了後に、先生から甘いお菓子をたくさん御馳走になり、いささか目を白黒したことなど、今はかえらぬなつかしい想い出となってしまいました。

先生のお墓は水沢市の国鉄水沢駅の少し南にある、緑の豊かな小高い丘の上にあります。

東北本線で盛岡、八戸などに出張の折、車窓から此の丘が見えてくると、先生のやさしいお顔が胸に浮んで参ります。

先生の御冥福を祈って止みません。

仙台高等工業学校創立七十五周年
東北大学工学部創立六十周年
記念事業後援会発足に当って

佐藤利三郎

青葉工業会誌で御承知のことと存じますが、記念事業について報告してほしいとの依頼がありました。電気・情報系同窓会の各位には今後一層の御支援、御協力を御願いしなければなりません。ここに経過報告を申し上げ御了承を賜わりたいと存じます。

記念事業の計画は五年程前の青葉工業会二十周年記念式典のときに素案が示され、青葉工業会の総会や各支部の総会で審議され、五十二年に記念事業計画立案委員会が作られました。その下部の作業委員会で一年半にわたって計画がねられました。その後計画立案委員会の議を経て青葉工業会総会と工学部教授会に報告されました。しかし業界は酷しい状況にもありますので、在京の諸先輩との懇談会をもち、その実施の可否を検討して頂きました。

その結果、有志による記念事業後援会世話人会を作り、それを中心に記念事業後援会準備会を五十五年二月十六日に結成致しました。準備会の会長は鳥山四男先生に御願いし、SKKの先輩、工学部の学内外の同窓生からなる約九十五名の準備会委員で、記念後援会発足の準備を致しました。会長・顧問・副会長・理事・評議員の御依頼を行うと共に、後援会の規約・運営方法等を含む記念事業趣意書案の作成を行い、五十五年十一月四日に記念事業後援会発足を迎えました。役員総数約六千人ですので設立総会を開催することができません。そこで在仙の後援会役員の会議をもって設立総会に替えさせて頂きました。以来募金に対する免税処置を含む、文部省・国税局との交渉を進めて参り、五十六年三月一日から募金を開始する運びとなっております。

記念事業の内容は募金額十億円で、青葉記念会館を作り、それを拠点として、産学協力・国際交流を柱とする研究・教育の進展に寄与し、青葉工業会の会員の親睦・交流を含む青葉工業会の活発な活動を後援することであります。七億円は会館の建設に、三億円はその運営資金であります。

募金の十億円のうち七億五千万円は法人から、二億五千万円は同窓生及び本学に関連ある個人からと計画されています。青葉工業会員は二万人以上ですが約一万人の方から約二万円の割合で御願いし学内に居るものはその約十倍を割当てて、その目標を達成するように計画されています。

四月又は五月には各位に募金の御願いが送られることになって居ります。何卒この事業が成功するよう何分の御協力を御願いする次第です。

二村先生御退官

永年本学電気系にあって研究と教育に力を尽してこられた二村忠元先生は、昨年四月一日を以て東北大学を停年御退官になられました。

先生は、長野県のご出身で、松本第二中学、松本高校を経て、京都大学工学部電気工学科を昭和十五年に卒業され、東京大学、東北大学において一年間研究に従事された後、昭和十六年から二十年まで、創設時の京城大学理工学部助教授として教育・研究に当たられました。戦後、昭和二十一年に、東北大学助教授として迎えられましたが、同三十年に教授に昇任され、昭和五十三年四月に電気通信研究所に移られるまで電気工学科電気理論講座を担当されました。この間、昭和四十四年から四十八年までは大学評議員、昭和五十三年からは電気通信研究所長として、御退官まで弛まず研究、教育に尽力してこられました。

先生は、我国の電気音響学の先駆者である故抜山平一教授の下で電気音響学の研究に着手され、爾来、電気音響機器、音場解析、建築音響、騒音・振動の制御など、音響学の広い分野に亘って研究を続けてこられました。なかでも、スピーカコーン紙の振動の解析、楕円体、円板、リボン等による音波の放射、散乱、回折などの数学的解析、スピーカの曲面配列による指向性合成法の確立などの研究は、高く評価されております。さらに、音響機器や室の音響特性の評価は、物理的側面だけでは不充分であるという考えから、心理的評価の研究にも着手され、これはその後、変動騒音の評価、地域環境騒音の社会心理学的評価などの研究につながっていきました。

二村先生は、また、日本音響学会副会長、同学会誌編集委員長、日本騒音制御工学会副会長、日本音響学会会長を歴任され、現在日本騒音制御工学会会長を務めるなど、学会活動においても指導的役割を果してこられました。

さらに、先生は、その識見を買われて、中央公害対策審議会騒音振動部会専門委員、環境庁電気自動車検討委員会委員長、国鉄技術委員会委員長、学術会議会員など数多くの要職を兼ね、社会的にも指導的役割を果しておられます。

昭和五十五年四月からは、東北学院大学工学部教授として、引き続き教育、研究に携わっておられ、各方面で御活躍中です。

通研所長就任挨拶

高橋　正

前年四月に二村忠元先生のあとをうけて、所長の任についてはや十ヶ月になりますが、日増しにその責任の重さに身のひきしまる思いでおります。

近年、科学・技術分野における我が国の進展には目覚しいものがあり、よろこばしいことと思います。例えば鋼鉄産業の分野では世界のリーダーになったとか、自動車産業、電子機器産業関係ではアメリカに並んだとかあるいは追い越したとか云われています。しかしながら、一歩ひきさがって見たとき、我が国に何のパイオニアの仕事があるのかとの先進諸国からの批判とか、自らの反省とがあります。信頼性のある工業製品を造り出し得たのは、一つの行き方であるとの弁もありますが、ここは素直に反省して、前進への方途を考えて見るべきと思います。もう世界に先生がなく、自ら新しいものを造り出してゆかなければならないとする自覚が、政府の立場から、また企業の立場から叫ばれ、創造科学・技術を目指していろいろのプロジェクトが組まれはじめ、世界のパイオニアたらんとする努力がなされつつあります。しかしながら、プロジェクト研究にはその核となる個の研究、時には核からプロジェクトへの発展に必要な研究成果の体系化などが必要であり、この分野こそ大学の研究所に期待される使命であり、ここに籍をおくものの個々の努力が科学・技術の発展につながるものと信じます。

東北大学の電気系は創設当時から、世界のパイオニアたらんとして、諸先輩が創造的科学・技術の発展に努力してこられ、これが伝統となって我々にひきつがれてきました。したがって多くの独創性に富んだ研究成果が生まれ、また創造的研究が進みつつあります。諸先輩の創造性豊かな研究の遂行に立ち合われ、教育されてきた現在の電気系の研究者が大きな業績をあげつつあることを考えると、研究者それぞれが自ら創造性ある研究を行うことによって、独創性ある研究者を輩出させうる環境をつくりだすことができるものと思います。

あえて電気通信研究所と云わず、電気系と申しましたのは、電気系の伝統である電気系学科と電気通信研究所が一体となって、教育・研究を遂行して来たところに電気通信研究所の今日があると信ずるからです。ますますこの態勢を理想的なものにし、創造性ある研究を通じて独創性ある人材を養成し、我が国の創造世界を創出したいものと思います。

最後に同窓の皆様の一層の御発展を祈っております。

同窓生便り

―東芝―

永井　淳

現在東芝の電気系同窓生は昭和五十五年卒業生も含め二三〇余名を数え、社内各事業部、研究所で要職について頑張っておられます。

東芝には電気系だけの同窓会はなく、故大谷元夫・元東芝副社長の「青春時代を仙台で過ごした仲間同志が一年に一回位集まって親交を深めるのもよいではないか」との御提案で、東芝青葉会という東北大学（含全学部、旧仙台工専）の同窓会があります。東芝を卒業されたOBを含めると六百人以上、現在活躍中の方は五百数十人という大世帯です。最近では昭和五十五年十一月二十八日、川崎日航ホテルで盛大な東芝青葉会総会と懇親会とが行なわれました。昔の卒業生は知らない「青葉燃ゆるこのみちのく……」という学生歌を皆で歌ったり、大いに語りかつ飲むという楽しい夕べを過ごしました。この同窓生のうち五分の二が電気系の卒業生ということになります。

さて東芝での同窓生の活躍の一端をご紹介しますと、西崎太郎顧問（役員待遇）（昭10電気）、日本の電子部品事業を支える二大事業をとりしきって居られる池田取締役電子事業部長（昭19電気）大戸取締役半導体事業部長（昭22電気）を始め、安藤重電本部首席技監（昭22電気）田口機器事業部長（昭28電気）伊東重電本部技師長（昭28通信）等枚挙にいとまがありません。

また東芝OBも宮地輝威大先輩（昭4電気）をはじめ関連会社へ出られた築地東芝機械常務（昭15電気）小野丁BA専務（昭16電気）江本東芝バロティーニ社長（昭24通信）等の方々が元気に活躍しておられます。

さらにNHKから遠藤敬二（昭20電気）、電々公社から田鎖幸雄（昭21電気）池内淳一郎（昭23通信）大塚順三（昭26通信）、電波研から尾方義春（昭18電気）、防衛庁から早坂周市（昭27通信）、等の各氏が入社され、今までのキャリアを生かして御活躍中です。

東北大学の電気系からは毎年十名以上のフレッシュマンを迎えています。今後もこれ等先輩に続く後輩の入社を熱望していますので、仙台の諸先生方の御配慮をお願い申し上げます。（昭26電気）

―山形大学―

佐藤　益美

最初に、当地における同窓の諸先生方の近況や学内外での活躍ぶりを御紹介致します。

最長老の近野先生（電気21年、メカニカル・フィルター）はこの四月から工学部長として学部、大学の運営に日々腕をふるって居られます。また、庄田先生（電気23年、高電圧）は現在も引続き短期大学部の主事として重責を担って居られます。同期のお二人、大内先生（電気28年、システム・制御）、熊谷先生（通信28年、薄膜）はそれぞれ学部の将来計画の委員として、学生の厚生補導関係の委員長として最近までいろいろご苦心なさっています。原先生（通信33年、情報処理）は米国の生理学関係の研究所に長期滞在中で皆が羨みあるいは恨んでいます。一方奥山先生（電子38年、薄膜）はこの春まで過ごした西独マックス・プランク研究所の余韻がまだ残っている風です。西塚先生（博士42年、電子回路）と最若手の佐藤（雄）先生（電子39年、磁性体）はもっぱら研究に専念されています。佐藤（益）（電気32年、プラズマ）は学部の教務関係のまとめをやらされてます。

さて、私共の電気系でカリキュラムを来年度から改定することになり、その作業に関係しましたので書き添えます。一部必修を含む自由選択の日本流に替えて、五年程前からもっぱら米国で行なわれている方式を取り入れました。これは互に関連する科目同志を学期順に線で結び、例えば、丙の科目を聴講し合格するためにはそれに先立つ甲の科目を修得（合格）していなければならないと云うものです。科目の整理になっても、いざ実施してみると、いろいろと支障があり、修正して制限をゆるめるなどしてもなじまず、結局はやめることになりました。カリキュラムでは揺れ動きましたが、国情や教育制度の異なる国の方式を導入しようとしても、日本は日本なりの道があるということを以前にも増して強く感じて居ります。

同窓会名簿作成のお知らせ

今般、東北大学電気・通信・電子・情報同窓会名簿の昭和五十六年版を作成すべく準備を進めております（昭和五十六年末完成の予定です）。本年四月以後の移動に関する情報も含めて同窓生各位の御協力を切にお願い申し上げます。

さて、今回の名簿にも昭和五十三年版と同様巻末に広告を掲載致すことになりました。これは財政上の理由もありますが、会員同志各分野の情報交換を強固なものにしては、との趣旨でもありますので、その節はぜひ御理解と御協力を賜わるようお願い申し上げます。

なお、同窓会名簿としては他に青葉工業会名簿がありますが、これは工学部全学科卒業生を網羅したボリュームのある会員名簿です。これに対し、電気・通信・電子・情報同窓会名簿は、いわゆる電気系学科卒業生のみを対象とした、よりコンパクトなものになっており、出身高校の記載や現住所と自宅が異なる場合両方を載せるなど致しております。

同窓会大阪支部便り

幹事　佐々木　玲一

大阪支部は商業都市大阪を中心に、古き都京都・奈良、ポートピア博覧会で話題を提供している神戸の他、滋賀、三重、岡山、和歌山の近畿二府六県に在住する精鋭約三九〇名（昭和五十五年現在）の卒業生で構成されています。

職業別の内訳は、電気関係の製造会社に勤務されている方が約三〇〇名、学校、官公庁関係の方がそれぞれ約一〇名、その他自営、放送、新聞、電力、ガス、鉄鋼、造船、自動車、化学、金融、保険と多くの業種にわたり、近畿圏のみならず全国的な舞台でそれぞれ重要な地位で活躍をされております。

地域別では大阪約一五〇名、兵庫約一二〇名、京都約五〇名、奈良約二〇名、滋賀、三重各約一五名、岡山約一〇名、和歌山約五名と広い範囲に分散しておりますが、京阪神間に約八〇パーセントの人が集中しており、また勤務先も松下電器約一一〇名、三菱電機約七〇名、島津製作所約二〇名、住友電工約一五名と集中しているのが特徴です。

支部の活動としては、仙台より先生が関西にお見えになるのを機会に年一回を目途に集まり、東北大学の様子や仙台の近況等をお聞きし、相互に親睦をはかると共に切磋琢磨しあっております。

以上簡単に支部の現況をご報告いたしました。

なお、現役員

支部長　佐藤銑太郎（電11・サノン工業）
幹事　岡久雄（電27・三菱電機）
幹事　佐々木玲一（通28・松下電器）

電気通信研究所の近況

通研広報委員会

電気通信研究所は昨年四月、二村忠元所長の後任として高橋正教授をお迎え致しました。高橋先生は表面物性の国際的権威として知られておりますが、ここに新たに通研所長としてもリーダーシップを発揮して頂き、通研の発展のために御尽力頂くことになりました。

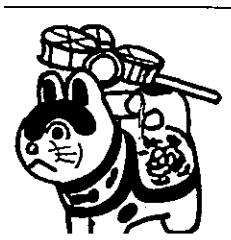
通研は今年創立四十五周年を迎え研究部門数二十と附属通信用結晶育成実験施設、附属格子欠陥構造解析実験施設、附属工場および事務部を有する大世帯に発展して参りました。

各研究部門の専任教官としては、音響通信部門は比企静雄助教授、電気通信方式部門は野口正一教授と原尾政輝助教授、固体電子工学部門は宮本信雄教授と大見忠弘助教授、電波伝送部門は西田茂穂教授と米山務助教授、超高周波部門は小野昭一教授と水野皓司助教授、通信用電子物理部門は武内義尚教授、電気通信材料学部門は津屋昇教授と荒井賢一助教授、情報理論部門は那須正和助教授、光波通信工学部門は川上彰二郎教授と宮城光信助教授、記録工学部門は岩崎俊一教授と中村慶久助教授、超音波通信工学部門は山之内和彦教授、固体振動回路工学部門は柴山乾夫教授、超真空電子工学部門は高橋正教授と蝦名惇子助教授、電子音響学部門は御子柴宣夫教授、量子電子工学部門は稲場文男教授、プラズマ電子工学部門は沢田康次教授、集積回路工学部門は西沢潤一教授と須藤建助教授、また光電変換部門と真空電子装置部門は高橋正教授、制御工学部門は沢田康次教授が兼担として活発に研究活動を続けています。

昨年三月、小野寺大教授の突然の御不幸があり、通研にとって大きな痛手となりましたが、職員一同先生の御遺志を継ぎ更に努力するつもりです。ここに改めて先生の御冥福をお祈り致します。

異常気候の昨年は梅雨明け後暑い日が殆んどないままに秋になりました。通研恒例の行事では、六月にバレーボール大会が行なわれ稲場研が優勝し、七月には九十名の参加者を得て通研パーティが楽しく行なわれました。また十月には十和田、八幡平方面への一泊二日の旅行があり、十一月の駅伝大会では参加五十チームのうち西沢研が優勝しました。今年の就職は学部生、大学院生共に順調に決定し、今卒業研究の仕上げに忙しい時です。以上簡単に電気通信研究所の近況をお知らせ致しました。末筆ながら皆様の御健闘をお祈り申し上げます。

（米山　記）



東北大学 電気・情報系の近況

電気・情報系運営委員会

仙台では十二月末例年にない大雪が降り、送配電線に大きな被害が生じました。全国的にも寒気が厳しいようですが、会員の皆様には益々御健勝のことお慶び申し上げます。

電気・情報系のこの一年間のニュースをお知らせ致します。既に皆様御承知のことと存じますが、和田正信教授が昨年三月の御定年を直前にして、一月十日膵臓腫瘍のため急逝されました。和田先生の液晶表示素子の理論とその工学的応用に関する御研究は、日本はもとより世界的にも高く評価されており、今後益々の御活躍が期待されていただけに、誠に哀惜の念にたえません。皆様とともに先生の御冥福を心からお祈り申し上げます。また昭和五十三年四月通研所長に就任されるまで、三十年にわたり電気工学科の助教授、教授として学生の教育、研究に尽力された二村忠元教授は、昨年三月定年退官され現在東北学院大学工学部教授として、また日本騒音制御工学会会長として幅広い分野で御活躍中です。

電気工学科では江端正直助教授が昨年九月熊本大学電気工学科に転出され、通信工学科では伊藤貴康助教授が教授に昇任し情報機器工学講座を担当されました。また電子工学科では、樋口龍雄助教授が教授に昇任し電子制御工学講座を担当され、渡辺英夫助教授は仙台電波高専教授に御転出になりました。電気系三学科および情報工学教室の教授、助教授の現員は次の通りです。

電気工学科

教授・竹田宏（主任）、村上孝一、安達三郎、中鉢憲賢、穴山武（一般電気工学出向中）
助教授・千葉二郎、後藤幸弘、菊地新喜、大沼俊朗、阿部健一

通信工学科

教授・清水洋（主任）、虫明康人、星子幸男、斎藤伸自、高木相、曽根敏夫、伊藤貴康
助教授・斎藤恒雄、石曽根孝之、中村僖良、西関降夫

電子工学科

教授・柴田幸男（主任）、松尾正之、脇山徳雄、佐藤徳芳、樋口龍雄、
助教授・針生尚、星宮望

情報工学教室

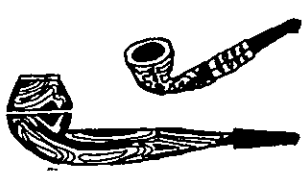
教授・重井芳治（主任）、佐藤利三郎、木村正行
助教授・長沢庸二、丸岡章（アメリカIBMへ出張中）、中村維男

また大学院は次の三主任によって運営されております。

電気及通信工学専攻
主任・星子幸男教授
電子工学専攻
主任・沢田康次教授
情報工学専攻
主任・城戸健一教授

本年度就職斡旋を担当して、各企業の電気・情報系の学生に対する求人熱には驚かされましたが、石油、輸出超過の問題など日本をとり巻く環境が厳しいだけに、今後のことが気掛りになります。

電気・情報館の前庭に、和田先生がその設立に御努力された工学図書分館が年末に竣工し、キャンパスも一段と整備されました。新年度にはまず電気・情報系図書室が移転することになっております。

末筆ながら会員の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

（竹田　記）